哲學研究　第四十六號　六八

佛教の預言說

手島文倉

第五節　授記の種類

(一)佛の作された預言中、未來授記の思想は佛教に於て特に重要な位置に在り、且つ現世の應報でなく、只來世の善惡報應をのみ授記と指すこと、等は已に前述した所である。而して犯戒致惡持戒招善の敎から當然生る可き思想は、求道者の持戒犯戒の程度に應じて授記預言も當然變化有つて然る可きであるとの考であらう。又、實際原始佛敎に於ては、授記の形式內容俱に相手の修道行位の優劣に從つて、種々と高下の差等が判然とあつた樣である。今、授記には何れ丈の差別種類があるかと云ふに、先づ最も古い形を物語つて居る龍樹の記錄から紹介しよう。『智度論』卷三十二(往二一、七十四)に依ると授記に關する原本的の狀況が詳述されて居るから今その大意を略述する。

一體佛から來世の授記を受くる者は、三乘六道の九界に亘つて居るが中に、當來作佛の記は菩薩に限られて居り、聲聞への授記は今世後世の得道を記し辟支佛には後世の得道をのみ記し、更に他の六道の人天畜生などには單に後世の受報を預言する

福といふものは、之を求めやうとすると、却て逃げ出して捕へ難いものであつて、而して吾々が幸福などを念頭におかず、各其職としてゐる所を努めてゐる中に、何時か知らん默うて自分の懷の中に入つてゐるものである。中庸に君子居易以俟命。小人行險以徼幸。といつてゐるのも、之と同じ消息を傳へたものであらう。つまり人生は、カントの無上命法に鞭たれて各其志す所を行ひ、而してポープの、『近くて遠い見、そて見えない幸福』を、不用意の中に收獲しつゝ進で行くものであらう。(大正八、一〇、一九)

に止つて居るのである。九界中、斯る區別の存するは、持戒證果に差等があるからのことに外ならぬ。又聲聞には今世の記をなす事も時としてあると謂うが、之は極めて稀で、今日吾人の云ふ授記のうちには始んど意味しない事である。而して又、授記發菴の形式に於ても自ら差別が有つて先づ諸佛の常法として衆生に授記さるゝには、佛の微笑に依て口中の四牙より青黄赤白縹紫等の無量光明を發し、上顎の二牙より出る光は、三惡道を照らして妙法を演說し、諸法の無常、無我、安隱涅槃の法を現說し、若し衆生有り、能く此の光明に浴し、妙法を信解し得る者は、身心忽ち安樂を感じて人天に轉生する事を得るのであり、又、下顎の二牙より出る光は、人天乃至有頂天を照らして、若し聾盲瘖瘂狂病の者此に遭ふとあらば忽ち除愈を得可く、又、六欲天人、及び阿修羅は此の光明と妙法を見聞して五欲の樂に厭嫌を生じ直に身心の安樂を享受し、又、色界の諸天は、禪定の樂を受けて居乍ら、此の光明を見、說法を聽いて禪樂に厭患を生じ、馳せ參じて佛所に來詣すると云ふ事である。此の光明はかく十方に到り、六道を遍照し、佛事を作し了つて繞身七匝し、復た再び佛身中に還攝するがその還攝の位置に依て授記の差等が見られる。地獄の者を授記する時は、光明佛の足下より復歸し、畜生に記する時は、佛膊より、餓鬼に記する時は佛脛より、人間に記別を與ふる時は、

佛臍より天上界の記には、曾より聲聞の記には佛口より、辟支佛に記するには眉間より、更に菩薩得道の授記を作さんとする時は光明、佛の頂上より、再び佛身中に還攝すると云ふのである。授記を作さんとするには、先づ斯る瑞相を現じて、然る後、阿難等の聲聞が、佛に對して其の不可思議を問ひ、かくて愈々授記の文を宣說せらるゝと云ふ順序になる。

斯る授記の差別は最も原本的の區別であつて、多くの小乘經文中の授記を見ると大底之に准じて居るやうである。（最も好い例は『撰集百緣經』卷一、二、の授記經などであらう。）然るに後年の大乘經文に到つては、授記とし云へば殆んど皆、當來作佛の菩薩授記ばかりの樣になつて居るが、又、思想の發展上、已むを得なかつた者であらうと思はるゝ。彼の提婆や阿闍世の如き五逆罪を持つ者は、小乘經文では、全く墮獄受苦の預言が大部分であるのに『法華經』や『未曾有正法經』抔に到ると、彼等は全く罪惡深重の色だに無きのみならず、當來成佛の授記を堂々と受くるに至り、甚だしきは、或る經等には彼等も佛の恩人、佛德の無量を發揮せんための方便の惡人とまで見らるゝに及んで居る。斯る著しい思想の發展は一朝一夕の事でなく相當の發展過程を持つて居る者に相違ないが、今、此の問題を論究する前に、先づ諸種の經文抔に見へた授

記の種類に就て一瞥して置かねばならぬのである。

（二）授記を類別するに經文、或は古來學者の說にして多少異なる試をした者も少なくないが、先づ最も單簡なのは、二種に分つて無餘記及び有餘記とする說であらう。之は支那の學者の說であるが、或は又、前者を有覺時定記、後者を時無量覺時不定記と稱する人もある。前者は卽ち預言の內容極めて明確にして幾年の後、成佛して何如來と號し、國土衆生、壽命、說法滅後法住抔の狀態一々詳細に懸記せらるゝ者を指すのであつて又、後者は反對に、極漫然たる空漠遼遠の授記で例之、無量劫の後、何佛の世に生れ、彼に從つて聞法信解し、遂に授記を得べし抔と記す類を云ふのである。此二類說は餘りに單簡に失し、始んど多くの授記たる無餘記卽ち時の明記された者の中でも種々形式が違うことを眼中にして居ないから雜薄に失すると評せねばなるまい。斯る單なる形式的分類に對して、今少しく內容批判に傾いた分類の仕方を說いた經文は、羅什譯の『首楞嚴三昧經』下卷（黃七、八、九、一）であらふ。此經では、佛は堅意菩薩なる者に對して、菩薩の授記に四種有ることを說き、第一、未發心而與授記、第二、適發心而與授記、第三、密授記、及び第四、得無生法忍現前授記の四者を立てゝ居る。第一は五道の衆生中、諸根猛利にして大法を好樂する者に對し、佛は、此の人若干百千萬億阿僧祇劫の後

無上菩提心を發し、同樣多劫後、菩薩道を行じ、百千億の佛を供養し、無量の衆生を敎化し、又、同樣多劫にして無上菩提を成得し、某時某佛、某土、聲聞衆、壽命、滅後法住の歲抔、詳細に悉く洞觀し了つて彼に與ふる懸記を未發心而與授記と稱するのである。第二は人有り、久しく、德本を植え、善行を修習し勤苦精進且つ諸根猛利にして大法を好樂し、衆生の爲めに解脫道を求むるの大悲心を有し、若し一念發心すれば、忽ち不退地に住して菩薩位に證入すべき者、是の如き人、適々發心すれば卽ち諸佛彼に成正覺の記別を與へ、佛號、國土、壽命等一切を懸記する、之れを適發心而與授記と稱すのである。第三は菩薩有り、未だ授記を得ざるを以て、常に精勤して無上菩提を求め、受法堅固、淨戒捧持、大忍力を以て衆生を等觀し、一切の善を求め、身心不懈なる頭然を救ふが如く、四禪に安住して佛智を求め、六度を久行して已に成佛の相ある者、時に他の菩薩天龍八部等、皆その德行を讃嘆して措く能はず、何が故に彼が如き者、未だ佛說を得ざるやと疑ふに至り、佛、乃ち神力を以て彼等大衆には授記の內容を知らしめ、幾時成道して何と號し、國土、壽命、聲聞、等を詳記して其の疑念を決了しつつ、而も此の菩薩自身には知らしめざる者、之を菩薩密得授記と稱するのである。第四は、菩薩有り、久しく善根を集め、常に梵行を修し、無我空を觀じて一切法の無生法忍を得たらんに、佛、彼の功德

智慧一切具足せざる無きを知つて人天大衆の中に於いて現前記別を說き、『善男子よ、汝、若干百千劫を過ぎ、成佛して某と號し、國土、聲聞、壽命是の如し、』云々と記し、大衆は之を聞いて無上菩提心を發し、彼の授記の菩薩は歡喜して身昇虛空七多羅樹して後佛を禮し去ると云ふが如き、之を現前授記と稱するのである。以上四種授記の說明に次いで、更に經文には、實例を出し、師子吼王樂欲居士子の如きは未發心授記を得しもの、文殊の如きは適發心の受記の、智勇、益意二菩薩の如きは、密意授記を得しもの、佛や彌勒等は實に現前の記を得し者であると記してある。此の四類說は同じ形式分類であつても內容に立入つた區別が說明されて居るので、而も第一は五道の衆生、第二は人、第三、四、は菩薩と謂ふ風に、順次上下の段階が認められて居るのであるから、之は大に吾人の後に論ぜんとする處であるのである。

(三)尙ほ此の四種授記說を引用說明し乍ら、第五の一授說を加へて五種授記說を記した者は、龍樹の原本を註釋したと云はるゝ『菩提資糧論』第三、(來六一八十五、)の記文である。之に依と殊勝授記を得るに大乘では四種の別を立つると云つて『首楞嚴經』と同じ樣に、第一、未發菩提心授記、第二共發菩提心授記、第三隱覆授記、第四現前授記の四種を列擧說明し、第三の隱覆授記に付ては、『此人或聞自授記、於六波羅密、不發精進、如其不聞

更發精進、爲令不聞欲使他人聞其授記斷疑心故、佛以威神隱覆授記、』と巧に說明してある外、大體は前經と變りは無い。 詰り第三の密授記と云ふのは、當人に知らすれば慢心懈怠の怖れあり、他人に告げざれば、疑念を決了する事が出來ぬと云ふので當人にのみ知らしめず、大衆には公宣する所の方便的授記の事である。 然るに今一つ第五に密意授記なる者が有りとし、『法華經』の『我等皆隨喜、大仙蜜意語、如授記聖者、無畏舍利弗、我等亦當得、成佛世無上、復以密意語、說無上正覺、』なる偈文を引用して本據とし、此授記の必要は、或る論師の說に依ると、未だ聲聞に凝固せざる者には菩提心を發せしめ、已に菩提心を發せる者には流轉の苦を畏れしめ、無餘涅槃を願ふ者には堅固の菩提心を起さしめん爲で、又他佛國來の菩薩衆にも同樣の記を與ふる必要有るからだと說く者もあると說明してある。 詰り、此の密意授記と云ふのは、佛の密意の存する所で、常人の揣摩臆測を容さない所の方便懸記である。 然し、順序から考へると隱覆授記の一部分に過ぎない樣で、別に第五に數ふる必要はなからふと思ふ。 要之、隱覆とは、他人に知らしめて當人には知らしめないと云ふのだし、密意と云ふのは、他人に知らしめないけれども、各人自ら佛記を受くると云ふので佛の同一方便から出た秘密の懸記であるから、吾人は之を一括して密授記と稱して置き度いと思ふ。

(四)然るに天台智者の說は授記に就ても興味有る考へを呈出して居る。『法華文句』第七、上、(調一、六十八)に依ると、彼は『首楞嚴經』や『瓔珞經』の授記說を陳べた後、天臺一流の四悉檀說から授記を區別せんと企てゝ居る。元來悉檀(Siddhānta)と云ふのは、佛の說法全體を分類して見る四形式に名けた者で四者相倚つて說法を滿足具備するから四悉檀と名けたのである。第一は世界悉檀で淺近の法を以て里耳に入らしめ、汎く歡喜信受せしむる方便說である。第二は爲人悉檀で聞法者の機根に應じて其の人の善根を增長せしむべく順導する形式を云ふのである。第三は對治悉檀で聽法者の邪念疑惑を先づ退治して置いて、然る後平靜に說法するを云ひ、第四の第一義悉檀とは聞法者の心已に純熟して深妙法義の理解に堪ゆるを以て、始めて眞實妙諦の第一義を說くを云ふのである。智者は此の四形式に相臨めて四種の授記を想定して居るが思之第一の世界悉檀與記と云ふのは、淺近の理解に適悅して不退の善心を發し、解脫の大道を求めんとする者に對せる授記で詰り未發心授記に相當する者であり、第二の爲人悉檀與記と云ふのは、佛が大小機根の差に應じて各々善根を增長せしめ廣く衆生のために、共成菩提の大願心を發さしむるに至る時與ふる者で、詰り適發心授記に相應する者であり、第三の對治悉檀與記も、第四の第一義悉檀與記も、同樣に

又密授記及び現前授記に相當する者なること、類推に難くあるまいと思ふ。此の四悉檀與記は天臺一流の考であるけれども、藏通別圓の四法に相臨めて淺より深に、低より高に、思想の發展純化を授記に認めた點は、大に吾人の參考とすべき者たるを信じ、『首楞嚴經』の四種授記が、自ら思想發展の順次に在る事を、智者と俱に信ずる者である事を此に一言して置きたいと思ふ。

（五）最後に今一つ見る可き經文は、智者も引用して居る如く、『菩薩瓔珞經』第九、の『無着品』（宇四、六十三、一）中に於ける八種授記の說である。八種は共に佛大衆中に在つて或る人に授記を與ふる際に於ける八形式を指すので、便も、自、餘、遠、近、の四範疇を二つ箇組合せて八種の形式を得るのを云ふのである。自、餘の二者は受記者と他の大衆との意で、遠近の二者は數に制限無く、單に佛を中心にして空間的距離の大小を意味した者に過ぎぬ。但し經文には、佛が明觀菩薩に向つて八種因緣の記を列擧し示す文と、後に佛之が解說を試むる所と、順序並に詞に於て多少相違して居るが今大要を摘抄すると次の樣であると思ふ。第一、己自覺知餘者不覺の授記とは、此の人未だ如來の四無所畏を得ざれば發心して大願を誓持して居るけれども、廣く衆生に及ぶ善權方便を缺ぐので、佛記を被るも自己一人之を信受し他の大衆は、可能性(Possibility)を想はな

いので誰も覺知する筈がないと云ふ場合である。詰り適發心授記に相當する時を指すのであらふ。第二、衆人悉見自不覺知の授記とは、前者の反對で此の人發意して廣く衆生に善根を及ぼし、四無所畏を得て衆生を教化するが故に、大衆その可能性を通して佛記を知り得るけれども、自分は却つて知覺しないと云ふ、前の密授記に相當する義である。第三、己身自知餘者亦見の授記とは、此の人七住地に在つて空觀を修し、衆生の染著想に計らず、初め道心を發してより未だ曾て我よく未來成佛せんの高貢慢心を發したる事無く心虛空の如くに、四無畏、空觀三昧、善權方便を自在に獲取任運する者なるが故に、佛の一度懸記せらるゝや自他俱に知らざる者無きを云ふ、詰り現前授記の事である。第四、己身不覺餘者不知の記とは、此の人未だ不退轉地に住せず、善權有つて三尊を信樂し、諸佛に供養承事すと雖も、未だ無著の行を得ず、又佛土を嚴淨し、衆生を教化する等の事をも得ざるを以て、假令、佛は無量劫の前途を洞察して之に懸記する事有るも、自他共に覺知する者無しと云ふ、詰り未發心授記に相當する義に外ならぬ。以上の四種記を四悉檀乃至四種授記の順に低より高に配列すれば、第四、第一、第二、第三の順序となる。次に遠近の四者とは、第五、遠者得決近者不得の記と云ふので、數には何等制限無く、佛邊から遠つて居る者は皆覺知するが、佛に近いて

居る者には何人もわからないと云ふので、恰も現前記と未發心記とを並べた樣に似て居るが、構想の點から云ふと第二に酷似して居ると云はねばなるまい。例之、彌勒の如き菩薩は、諸根具足、如來の無著行有るが故に、佛邊のものは知らざれども、彼の菩薩身邊の者は、皆當來成佛現前記を知るが如くである。第六、近者覺知遠者不見の記とは、前同樣に現前、未發心、の二記に跨る樣であるけれとも、若し構想の點から評すれば、第一に類似する者で、此の人は已に菩薩位に在るが、未だ賢聖の行を演說する能はざるが故に、假令衆相具足、法本を捨てず、無想法中に於て法性を壞せざるも、衆會の能く測定し得る所に非るを以て、近者は知るが遠者は少しも知らぬと云ふ事になる。第七、近者亦知遠者亦見の記とは、此の人無量の佛事を行じ、衆行具足し、生死の海を超へて彼岸に到達し、十方無量の世界に遍遊して不思議を作し、佛の神德を顯示するが故に、自他遠近、彼の授記を信ぜざる者無しと云ふ、詰り現前記の事に外ならぬ。第八、近者不知遠者不見の記とは、此の人、衆行具足せず、方便も無く、五欲を去ると雖も、未だ如來の法藏を悉く受持し能はざるが故に、恰も前の未發心記に相當する者を指すのである。以上の八種授記を前の四種授記の順位に低より高へ列して見れば、正に第四、第八は最下、第一第六は之に次ぎ、第二、第五は稍高く、第三第七の兩者は最高の現前

授記に當る如くなつて居る。左れば、終りに上來の各經文や學者の意見を一目表示して關係を示すと次の如くなるのである。

（首楞嚴三昧經）	（菩提資糧論）	（法華文句）	（菩薩瓔珞經）
(一)未發心而與授記	(一)未發菩提心授記	(一)世界悉檀與記	(四)己身不覺余者不知 (八)近者不知遠者不見
(二)適發心而與授記	(二)共發菩提心授記	(二)爲人悉檀與記	(一)己身覺知余人不覺 (六)近者覺知遠者不見
(三)密授記	(三)隱覆授記 (五)密意授記	(三)對治悉檀與記	(二)衆人盡見自不覺知 (五)遠者得決近者不得
(四)現前授記	(四)現前授記	(四)第一義悉檀與記	(三)己身自知余者亦見 (七)近者亦知遠者亦見

要之、經文中杯の授記には右の樣な種々の區別が記されてあるので之は自ら秩序整然たる綿密な思想發展の過程を暗示する者であると思はるゝので、次には之に關連して吾人が始めに見た原始的授記區分說から如何にして漸次發展し最後大乘現前の授記に到つて一切が理想化されて了つたか、その段階を少しく論究する事にして本稿を終へようと思ふ。

第六節　授記思想の發展

(一)原始の授記思想に於ては、九道の人天菩薩等の中當來成佛の大記を得る者は唯成正覺の必然性を以て生れたる菩薩に限られて居つて、他の八道の衆生の單に後世の受報とか、成羅漢辟支佛果とか、或は今世後世の得果と云つた風の小範圍に限られた者に比し雲泥の懸隔を存して居つたのであるけれども、之が進んで大乘經に到つては、人天菩薩俱に來世成佛の菩薩の記となつて居る事四種乃至八種授記の分類說に於て見た如くである。此の思想發展は著しい進歩と見ねばならぬ。詰り大乘經文中の授記は殊んど皆菩薩としての取扱をした懸記ばかりと云つて差支無い事になつて居る。此の區別差等の拘束から一變して平等菩薩の待遇に遷ると云ふは、容易の事ではないので、其の間必らず數個の過程段階の著しい者があらうと想定するのが本節の意見である。カントは實踐理性の有する二律背反(Antinomie)と云ふ事を說いて、最上善(Bonum Supremum)と完成善(Bonum Consummatum)との相互對立を論じて居るが今佛敎に於ける授記思想を見るに、初め小乘經文に於ては、持戒奉律と精進勤苦の度に應ずる結果の差等を當然の事として認め乍ら、後に大乘經文に入つては、成る

程授記發表の形式に於ては若干の差別を依然存して居るけれども、授記の內容結果に於ては何等の差別なく、皆當來成佛の預言と化するに到つて居るのである。換言すれば、小乘から大乘に遷つた授記思想の發展は、完成善の要求から出發して漸次、その形質を理想化しつゝ最上善の要求に接近して行つた者と見て差支無いのである。然し、左りとて佛の預言なる者が全く理想に依て隨意改變さるゝ者の如くでは、授記の權威に關する所からその威嚴莊重を保持せんため、說かれた經文が釋尊自身の過去世に於ける甚だしい勤苦精進持戒奉律並に之に依て得たる來世成道の授記を示すに到つたのである。詰り、佛の過去世に於ける當來成佛記は彼等佛徒に對しては、所謂授記なる者の云何に難得難受の者であるか、その原因過程結果の果して如何なる者であるがを示す好模範と成つた譯である。故に小乘の佛授記より大乘の夫れに到るに及んで、佛の勤苦精進を物語る授記原因の詞は愈々莊嚴悽愴實に峻烈を極むるに及んで居る樣に思はるゝのである。

扨て釋尊自身の過去世に於ける受記を傳へた經文は種々あるが、有名な者は然燈佛(Dipaṁkara)の懸記であらう。『太子瑞應本起經』上卷(辰十一、三十七)を見ると、佛は自ら宿命を觀じつゝ以て今日に至るまでの本生經授記經を說かれて居るが、彼も過去無數劫

時本凡夫であつて佛道勤求に志してより以來生死往來幾度なるを知らず、常に布施を行じ、戒を持ち、忍辱にして一心精進し、勇猛寂靜を樂しんで智慧を求め、諸佛に承事供養して、その積功累德一方でなかつたが而も容易に授記は得られなかつたと記し、又、昔、定光佛(然燈佛)の世には、自ら菩薩として現じ儒童(Māṇava)と號し、幼にして大道に志し、山澤に隱遁して一心禪定を修行して居たが、佛の出世を聞いて彼に到り、大願心を發せんとて出發し、途上、五百人の道士に論議を教授し、報とせる五百錢を受け、進んで一王家女瞿夷(Gopikā)の七青蓮華を持つに會し、之に五百錢を投じて五華を求め漸くにして佛所に到り、一心歡喜、散花供養した所佛は初めて、『汝無數劫、所學清淨、降心棄命、捨欲守空、不起不滅、無猗之慈、積德行願、今得之矣、……汝自是後、九十一劫、劫爲號賢、當作佛名釋迦文、』と云つて成佛懸記を與へたと記し、又、更に菩薩は喜んで入定、清淨不起法忍を得て、身昇虛空七仞し、下つて佛足を禮し見るに、大地濕濕で佛の步するに不適當であるを發見し、衣を脫で之を覆ひ、足らざるを髮を以て敷き、佛をして踏ましめた所、彼の佛は、『汝精進勇猛、後得佛時、當於五濁之世、度諸天人、不以爲難、必如我也』と預言讃嘆せられた抔と記してある。之は釋尊自身でさへ授記を得る迄に精進修行、容易に非る旨を說明した者で、便ち、授記の權威を暗示したに外ならぬのである。『撰集

百緣經』卷二の『報應受供養品』(宿十―四十九、―五十三、)は、凡そ此の類の佛過去世に於ける、本生、授記の經、十種を蒐輯した者である。或は佛、過去世、毗闍婆佛の世、一商主として佛と六萬二千の羅漢衆とを供養した時、佛に依て、『汝於來世、當得作佛、號釋迦牟尼、廣度衆生不可限量』の授記を得たとか、或は、過去梵行佛の世、灌頂王として三月四事の供養をしたので成佛記を與へられたとか、又は、過去商幢佛の世、一仙人として佛を供養したので當得作佛の預言を得た等その他、皆此の類である。之等は皆佛自身の宿世を物語る事に依て授記の威嚴尊貴を暗示せんとした背景に外ならぬのである。

(二)却說、斯る莊嚴な權威有る授記に就て、今一歩進んで考へて見るに、授記その者は、本來、佛道修行の意志堅牢にして淨心勤求、再び欲地耽溺の怖れ無き事を適確に洞觀した時、發せらる可き預言であるから、倘し、初發心時便成正覺の理から推考すれば、消極的惡人墮獄の記ならばいざ知らず苟も寸毫たりとも積極的授記であつて見れば、成聲聞の記も、成辟支佛の記も、將た又成菩薩の記も、皆成佛の授記と等しく、唯量の差であつて、何等質の相違でない事が明であるから、成辟支佛の記は一歩前途を洞察して聽て成佛の記に遷り易い事、明瞭であると思ふ。之卽ち大乘經文中、多くの授記が皆、成佛の記とされて居る所以で、殆んど小乘經の菩薩同樣の取扱を被るに到つた譯

である。然し尚ほ問題になるのは、消極的の記である。惡人墮獄の記を得たる者、卽ち佛に依て記せられざる者は、當來如何に成るべきかである。吾人の最後に論究せんとする事は、結局此惡人墮獄から出發して最終大乘の第一義的授記に遷る迄の思想發展過程を想定する事に歸して了ふのである。

最も、常識的に考ふれば極惡罪業の人は必然墮獄受苦の運命は持つて居るけれども、容易に佛に依て來世得道の預言は得られそうに思はれないのである。此の場合、佛は、墮獄の懸記を與へ、或は普通、『彼の與めに記せず、』と云はれてある。『增一阿含』第五、(欠一、十八、一)に五逆非を犯した點に於て最も有名な、最後まで佛に對する惡魔怨敵の權化として生涯を終始した彼の提婆達多(Devadatta)に就て、佛が『若使我當見提婆達兜身有毫釐之善法者、我終不記彼……受罪一劫不可療治、……我不見提婆達兜有毫釐之善法以是故記彼　受罪一劫不可療治、……身壞命終入地獄中。』と預言されたが如き、又は、『四分律』第四十六(列六、五、一)に同じ樣な彼の記を傳へて、『此癡人破僧有八非正法……在泥犂中一劫不救、……我若見提婆達多有如毛髮善法者、終不記言在泥犂中一劫不救、』と說かれてある如き、之等は卽ち墮獄授記の例であつて、破戒無慚の徒に對する佛の態度である。此れ最も常識的の預記で、吾人は之を授記思想の第一段階と稱す

るのである。

(三)然るに、此に一劫の間受苦不救とあるが、その一定時間が限られて居る、一劫經過の後は如何なるか。正しく罪報決濟して善惡無記の者となる以上、之れを善道に高上せしむる救濟の法二つある譯である。第一は、地獄受苦の畢れる後、漸次、他界へ輪廻轉生して徐々に善法を積ましめ、遂に佛道に引入れんとする救濟法と、第二は、今一歩常識的な現實の要求から出發して之を救はんとする理由が立つのである。提婆の例が出たから更に之れに就て考ふるに、『增一阿含』第四十七(四十七、八、)に依るに、彼の惡人の最後、熱病を患ひて佛に懺悔せんとし、現身大火坑に陷いるや、便ち眞の悔念を生じ、南無佛と稱へんとして辛うじて南無の一語を念じ得つゝ地獄に墮落したとある。阿難乃ち提婆の生處を問ふや、佛は『彼れ五逆罪有るが故に必らず阿鼻地獄に入るべし、』と答へられたので、阿難は大に提婆の辯護に努め、現實的要求から陳べて曰く、『提婆現身入獄とは我等の門族を辱しめずや、姓族父母を始め釋種の恥辱とならずや、彼れ身元より王種に出でよく有漏を盡して無漏を成じ、心慧解脫を得て現身果を證し、阿羅漢果に及べる者、正に無餘涅槃に入つて然るべきに非ずや。彼れ存命中、亦、大威神あり、神力を以て已に三十三天に遊び變化自在であつたでないか。彼にして墮獄と

は、何の點よりするも不審に堪えぬ。抑々彼れ在獄幾年にして其後は如何。世尊よ之を說かれよ』と、これ卽ち沙門としての提婆、佛の從弟、阿難の兄としての提婆を辯護した者である。佛此時、提婆の授記を示して曰く、『提婆在獄一劫の後、命終して人身を受け、四天王天、三十三天、焰天、兜率天、化自在天、他化自在天に展轉受生して六十劫中、三惡趣に墮せず、專ら天人間を往來して最後受身、出家沙門と成り、辟支佛を成じて名を南無と號すへし。其所以は、彼れ古今に博明に、誦習總持の德門少なからざりしが爲六十劫三惡道に入らず、又最後の一念に南無と稱へし善心に依て辟支佛と成り、南無と呼ぶに至るのである。』と說かれた。之れが卽ち天界轉生と現實的要求との二點から彼を救ひ得た授記である。而も天界轉生の理由は、一念南無の善心に在ると說明した救濟の仕方に注意せねばならぬ。『長阿含』第五、の『闍尼沙經』(伏九、二十九)では、阿難の現實的要求は一層明確な形に依て現はされ、多くの大臣、人民、佛弟子、等の命終するや、佛必らず之に授記し、十六大國の人、死する者にも亦記別を與へ乍ら、獨り摩伽陀國人に記を惜しむは何ぞや、取り分け、國王餅沙の如き、信佛尊法の心人、誠に愍むべき者がある優婆塞ではないか、何ぞ彼に授記を與へざるや等の具體的要求の詞に表はされて居る。

斯る場合の授記は、『首楞嚴經』に所謂、五道の衆生、餓鬼畜生等に與ふる未發心授記に相當する者で、正に授記思想發展の第二段階と稱するのである。但し未發心記は成佛記で、提婆の例は成辟支佛記に過ぎないけれども、吾人の先の論法からして之は何等差支無い譯である。

(四) さて、右の様な預言は、受記者死後の記別で、僅かに現實の要求と、寸善より得る天界轉生との結果、成辟支佛の記を得たに過ぎないのであるが、已に南無の一念位に斯程の功德を是認する事となつた以上、次に來る可き思想は現世に於て多くの至心善業を積み、供養功德を累ねたならば、現身受記の必らずしも不可能であるまいと云ふ考であらねばならぬ。但し此の場合、假令、至心至誠から出た善業でも、僅かの功德に依て直に受記するは、懸記の莊重を缺ぐの怖れがある。之に重要な莊嚴を施す者は、卽ち過去世に於ける積功累德の背景である。既に業に過去世に在つて無量諸佛を供養し、無上菩提に向つて向上しつゝある現身として見れば、現世の小善根を以て因緣として、當來成佛の記を受けらるべきは、何等理論上矛盾の無い事である。卽ち過去の偉大なる善業に現在善心再發の機會を得て居るのであるから、當來作佛の資格は十分である譯であるから、此の善業再發の機を重んずる點から見ると、正に斯る授

記は、適發菩提心授記に相當する者であると信ずる。此の思想を表はした經文は、例之、『阿闍世王授決經』である。

彼の惡逆暴戾の闍王も、一度懺悔發心して佛門に歸してより、耆婆の勸めに從つて佛を請じ、供養を陳べ、百斛の麻油を以て多くの献燈供養をした事が有つたが、偶々一貧母あり、兩錢を乞得て油を買ひ、辛うじて佛に一燈を献じ、至心に供養して佛を禮拜し、乃ち誓願して『若我後世得道如佛、當令夕光明不消、』と云つたと云ふ。翌朝、佛、目連に命じ、此の貧母の一燈を消さしめんとしたが、消滅する能はず。佛彼を止めて曰く、『止々此當來佛之光明功德、非汝威神所毀滅此母宿命供養百八十億佛、已從前佛受決、務以經法、敎授開化人民、未暇修檀故、今貧窮無有財寶、却後三十却功德成滿當得作佛、號曰須彌燈光如來至眞、世界無有日月、人民身中皆有大光、宮室衆寶光明相照、如忉利天上、』と。老母、此の授記を得て歡喜措く能はず、昇空百八十丈にして下つて佛を禮し去つたとある。後、更に闍王は、佛を請宮する事があつたが、之に先立ち、一園監に命じて美花を蒐採せしむるに、園監、花を採つて歸途、路に世尊の說法するを傾聽し、歡喜の餘り所持の花を悉く佛上に散じ奉つたが、佛その時、授記して『汝已供養九十億佛、却後百四十却、汝當爲佛、號曰覺華如來、』と公宣した。彼れ授記して歡喜昇身し、下つて佛を

禮し、却つて花無きを悟つて王の爲めに一命を終らる可きを怖れ、家に歸つて其婦に訣別したが、帝釋天、天華を盛滿して彼の空箱を賑はしたので、王の許に還り、一伍一什を語つた所、王、監人の授記を聞き、己の如かざるを耻ぢて、彼に深く懺悔したと云ふ。

時に耆婆、王に白して云はく『老婆園監の授記は至誠心の致す所、王宜しく自ら勞して供養を陳ぶべし、』と。閻王便ち九十日を通して至心に一寶華を作成したるに、一臣、佛の已に入滅せるを告ぐるや、王の落膽悲慕は一方でなかつたが、耆婆の勸に依て、自ら耆闍崛山上に登り、之を献じたので、誠意佛に徹底し、『却後八萬却、却名歡喜、王當爲佛、佛號淨其所部如來、刹土名華王、時人民壽四十小却、』との當來作佛の記を得たと云ふ。(宙七、一)此等三話は、卽ち現身受記の思想であつて、其の理由とする所は、過去供養佛の背景と、現世至誠の大善業とを擧げたのである。之れ正に授記思想發展の第三段階であると思ふ。

(五)斯くて轉生天界と現身善業とを併せ、更に過去供養諸佛の功德背景さへ出來た以上、斯る人は現前授記大乘菩薩に等しい譯であるけれども、今一つ考ふ可き場合がある。夫れは卽ち密授記、對治悉檀與記の思想で、換言すれば、他人の疑念を一掃する爲めと、受記者に懈怠慢心を生ぜざらしむる爲めと、二種の必要に逼つて佛の權方便

から說かるゝ思想である。畢竟此意味は、授記の尊嚴を保持す可く、且つ受記者の持戒精進を護念せん爲めに作さるゝ佛の慈悲に發した預言であつて、『阿闍世王問五逆經』(宿七、一十六、七、八、)又は、『增一阿含』三十二卷(欣二、一五十九、)中に於ける阿闍世王の授記の如きが好例であらうと思はるゝ。前者に在つては、闍王漸く懺悔の念有り、日夜先罪を悔いて悶怏怫々、遣瀨なかつたが、一日、提婆に五逆罪報の有無を質し、提婆之を否認した事を佛弟子の聞く者有り、佛、時に因果報應の眞諦を示し、且つ同時に王の善心發起、入地獄天界轉生の後、成辟支佛の懸記を說かれて曰く、『彼の王、父を殺すと雖も久しからずして我が所に到り、等信を得可く、命終の後地獄に墮し、更に後、四天王處、三十三天、炎上天、兜率天、化自在天、他化自在天に轉生し、復た、順次轉下再生して人間に生れ出家學道して辟支佛と成り、名を無穢と號すべく、其の間、二十刼中、三惡趣に入らず、人天に流轉すべし、』と。

彼の比丘、此の授記を以て闍王に傳ふるや、頗怏に惱める王は未だ佛の授記を到底信ずる事能はず、歡喜もせず、瞋恚も起さず、耆婆をして佛所に其の眞否を質さしめたと云ふ事である。又『增一阿含』の方では、吠舍離の最大長者なる者、疫病流行の救濟を得可く、佛の巡錫降臨を乞うた所、佛は闍王の先請を許したれば先づ彼の許可を求

むべきを勸め、闍王の授記を前同樣の文句にて語り、最後辟支佛を成じて名を除惡と號す可ければ、此の善語を以て王を歡ばしめ、その許可を求めよと、佛は敎へられた事になつて居る。闍王の授記は、兩經文、殆んど同じ事で、之は佛直接に闍王に記を與へず、彼を對治するの目的を以て隱覆に懸記を授けた譯である。之れ卽ち授記思想發展の第四段階に在る者で、無根信を得る闍王を全く大乘的に取扱ひ得る事も、成辟支佛の記が、全く成佛の記の前程と見做さる可き事も、前述の樣であるから此に說明の要はない。

(六)斯く進んで最後に發展したのが、第五發展段階たる、第一義的現前授記の思想で自他、遠近、俱に佛の記別を信受する大菩薩の授記なるものである。何となれば、已に過去世に依ても無量諸佛の供養を以て大功德を積み、已に前佛に依て記せられて居る位の求道者であり乍ら、且つ現世に在つても、勤苦精進して淨戒を奉持し、諸佛を供養し、一切の有漏を竭し了つた、天界轉生修養後の大菩薩となつて現じて居る譯であるから、一切の善權方便智慧として具足せざる無く、懈怠慢心の怖れ寸毫も有ること無き大願行地に安住する者として見らるゝ以上、最早や、思想の發展は之れ以上及び難い者である。其の辯才智解を以て妙法を說き、汎く衆生を敎化する事、三世の諸佛

と何等遜色無い程度にあるから斯る菩薩に現前の記を授くるも、人知らざる者なきは當然である。

此處まで思想を進めて見ると、彼等、惡人の代表的たりし提婆も阿闍世も、昔日の俤は寸毫無く、煩悶を超越して大乘甚深の理趣妙海に悠遊して居る、高邁莊大の氣分がある。見よ『法華經』の『提婆品』(盈一、一二、三)では、提婆は已に惡人でなく、却つて過去の善知識で、佛の大恩人と語られて居るではないか。佛、過去世、一國王として『法華經』を求めつゝ常に六度を行じて居つた時、一仙人有り、此大乘經を彼に宣說したのであるが、仙人とは今の提婆で、佛の成道は、提婆善知識の善導に因る賚賜であると說き『提婆達多、劫後過無量劫、當得成佛、號曰天王如來、……世界名天道、時天王佛、住世二十中劫、廣爲衆生說於妙法……佛般涅槃後、正法住世二十中劫、全身舍利起七寶塔』等と云つて、誠に堂々たる現前授記となつて居るのである。又、『阿闍世王經』下(宇八、一四十九、一)では、闍王地獄を出てより天上に生身し、上方五百四十五刹土を經て、嚴淨佛國の寶好如來の許に轉生し、又、文殊の敎を被つて、無生法忍を得、後、更に彌勒佛の許に生れて阿伽佉菩薩と名けられ、復た八阿僧祇劫を經て、成佛得道し、劫を歡喜見、刹土を藥王、佛號を淨其所部(淨界)如來と號す可く、壽四小劫、七十万聲聞と十二億菩薩とを敎化し、滅後法住、

乃至億万歳なるべし、抔とまで宣言せられた莊麗鄭重の現前授記となつて居るのを見る。更に『大寶積經』の二十八卷『大乘十法會』(地二、三十四)等に於ては、提婆や阿闍世は、全く過去の大善智識で如來所有の無量功德を對現せんため、久しく怨家の相を現じて居るが、實は大乘菩薩の方便に過ぎないとまで高調されて居る。其の他、『菩薩處胎經』二(盈十、三十七)には五十六億七千萬歳の後、彌勒當成正覺の現前授記を記し、『撰集百緣經』卷一、(宿十、四十五、—四十九)の『菩薩授記品』の如きも、多くの現前授記物語を集錄してあり、殆んど先づ大乘經文中の授記は、多方現前授記の好例であると云つて差支無い位である。今、迚も枚擧の遑がないから省く。

(七)以上、吾人は、佛敎に於ける人格的預言のうち、特に、未來授記の思想に就て、其の發展段階を五者に想定したのであるが、之に依て最初極めて常識的な記別から、漸次佛德の悲智圓滿を期せんとする要求の許に發展して、精練純化されつゝ彼の『首楞嚴經』に設ける四種授記の順位を以て遂に最高の第一義的授記まで如何に想像し易い過程を通じて發展したかゞ略明となつたと思ふから授記の論究は此に止めて置かうと思ふ。詰り此思想發展と云ふ者は、一言に蔽へば、常識的の差別的完成善の要求が次第に理想化されて最上善の內容に接近した者と見られようと思ふ。隨つて小

乘經文は多く完成善の立場であるが、大乘經文は寧ろ最上善の立脚地に立つて完成善を眺めて居る者と云つて差支無からふと思ふ。要之、吾人が上來論究し來つた所は、多くの佛典中に見へし佛の預言に就て、之を二種に分ち考へ、その內一般的の例と、人格的の例と、とりわけ、人格的頂言中、未來授記の思想に就て、適當と思はるゝ例とを擧げて、授記思想の由來發展を吟味せんとしたのが、主眼であつたのである。蓋し、佛敎の預言說中、授記思想は、勿論、佛敎の根本と云ふ程では決してないけれども、小乘經の常識的差別觀から、漸次發展して大乘經の無差別平等的第一義諦觀に進んで居るので、隨つて大乘敎では、古來十二部經の一に算して小乘九部に對する一特徵と認めて居る位であるからである。然し、かくて小乘經に全く無い授記が大乘經に忽然現出したかの如く特長視するのは當を得ない。只量の差別を撤廢し、質の純化を高調して純一平等の大乘見地に立つに到つたから之を大乘の特長に加ふるに及んだ者であらふと思ふ。極惡罪人の墮獄を預記された者が、今や一轉して大善智識となり、却つて佛の恩師と尊重せらるゝに到つたは何たる大變化であらふ乎。之に依て能く大乘の特長を闡明し得ると信じたから、十二部經の一に加へたのであらふ。左れば授記は他の預言と選を異にし、小乘から大乘に洎んでは、其の一大特長と認めらる

るまで、重要の位置に進んだ事を忘れてはならぬ。即ち、預言中授記は佛教特有の意義があり獨特の發展を遂げて來て居る事を知つて置かんと、初めて經文を讀む者は、少なからず奇異の感に打たれ勝ちであるから、此に此の小稿を認めた所以である。忽卒の間考察の精緻を缺いた點も少なくないであらうし、引用語句乃至經文の類も他に今少し適當なものもあつたらふけれども、自分の言はんとする所を多少なりと汲み取つて貰へたら野生の望外事である。終りに厚く、大方諸賢の御叱正を仰いで置く。

（大正八、一九、一三〇）